

---

# 雨上がりの街で

shota

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨上がりの街で

### 【Nコード】

N7450L

### 【作者名】

shot a

### 【あらすじ】

出会いなんてものは人それぞれ。

帰り道の電車での口喧嘩が初めての出会いになったとある生徒会長と不良少女。

それがきっかけで仲良くなった彼らは徐々にお互いに惹かれるようになっていく。

ある時、ふとしたきっかけから彼女の抱える問題を知った生徒会長の佑太は彼女の抱える問題を解決しようと動きだす。

## とある一日のはじまり（前書き）

初めまして。初投稿です。

まだまだ下手くそな文章ですが、読んでいただけたらうれしいです。

出来れば感想や誤字の指摘などお願いします（＾o＾）

## とある一日のはじまり

朝5時45分 遠くから大きな音が聞こえてくる。これを聞いてるとまずまず布団の奥に隠れなくなるっといった類の音だ。

だが、ここで踏みとどまっていても仕方がないということは分かっている。で佑太はゆっくりと体を起こす。

「今日も学校か。」

誰もいない六畳間に佑太は独り言を響かせ、通学の準備に掛かるのだった。

自分専用の洗面台で顔を洗い、その後は手では一人分の朝食を手際よく作り、耳でニュースの内容をある程度把握する。

「今日の一番のニュースは隣町の通り魔逮捕・・・だな。」

片手にトーストを持ちながらそう呟く。

佑太にとっては慣れた朝の一場面だった。親元を離れての一人暮らしの高校生活ももう二年と二か月が経過しようとしていた。

続いてのニュースです。アジアの主要国との会合に参加していた・・・

「そろそろ時間だな」

リモコンでテレビの電源を切り、鞆を持って出発。

「さあ、今日も張り切っていけますか！」

山本佑太のいつもと変わらない日常の始まり。

自転車に乗ってゆるい下り坂を颯爽と下っていく。

六月に入りいよいよ暑くなってきたこの街でもさすがにまだ朝日にあたためられ切っていない空気はすずしくて気持ちがいい。

佑太はこの風が好きだった。だからこうして朝練のあるはずもない部に所属しながらもこうして朝早くから駅へと向うのだった。

佑太の通う私立桜田高校は県内でも中の下つといった位置づけの学校だが、佑太の所属する特進科はそんな学校の成績向上を狙って5年前に創設されたエリートクラスで、その成績は県内で三本指には入ると言われている。

昔から勉強が嫌いではなかった佑太は、中学時代に塾の講師から薦められていたこともあり、この特進科を選択したわけであったが、実際入学してみると佑太にとってはたいして難しい授業でもなかったし、勉強もそこそこに一年の頃は特進、普通科の枠を超えて友達と遊びほうけたのだった。おかげで今では行き帰りが同じ同級生ならほとんどの人とよき友人と言い合える間柄になっていた。

「おつす！佑太！」

よく通る声が半分ぐらいの席が埋まった車内に響く。

「よお剛史！今日は朝練か。」

「まあな。しっかりアピールしてキャプテン狙わねーとなんねーかなー！」

挨拶もほどほどに素早く佑太の横の席に陣取りながら剛史がそう返す。

佑太と剛史は中学からの仲だ。スポーツマンの風貌を呈する剛史と細身の祐太の組み合わせは若干の抵抗はあるものの朝の通勤列車に見慣れない風景というわけではなかった。

「特進はもう数？の問題集授業で終わってるのか？」

この問の真意はだいたい見当がつく。おおよそ・・・

「また解答だろ。」

不意をつかれた剛史は一瞬黙ってしまったが、またすぐに笑顔を浮かべる。

「今週末にノートの提出があるんだよ。だからさ、今回は俺を留年させないためにも助けてくれよー佑ちゃん。」

「げっ、その名前で呼ぶんじゃないよ。」

全くだいやなことを思い出させる奴だ。

「そんなに冷たくしないでくれよ。佑ちゃん」

「わかったから。わかったからその名前で呼ぶんじゃねよ。」

「さっすがー。じゃあ今日取りに行くから今夜11時くらいに行くよ。」

「ああ。了解した。」なかば溜息をつきながら生返事を返す。こんな気楽な奴が新聞で騒がれる天才遊撃手なのだから世の中とはわからないものだ。

「今日も蓮、ズル休みかな？」

「まあそんなところだろうな。」

蓮と言うのはもう一人の付き合いの長い友人だ。同性にも惚れてしまう者が少なくはないという程の美貌の持ち主で、日々自由奔放な毎日を送っている友人、いや悪友の一人である。

その美貌故に彼に関する噂はどれも風変わりなとてつもないものばかりだった。彼が繁華街でホストをやっていると言う噂は一時期、生徒内で最も広がった噂だった。原因は、彼が噂好きの女子の問いに対しに對して、

「ホストってのも嫌いじゃないけどね。」と意味のわからない返答をしたことがそもそもの発端だといえるだろう。とりあえず告白された回数においては学校一であること疑いなしのイケメンだ。そんな事を言っていると蓮がいつもと違う駅から乗車してくる。

「おっはよー。」

相変わらずイケメン全開な声で車内の女性陣の目を一瞬自分の方に向けさせる。

「おはよ。」

「おっす！流石に3日連続ズル休みかと思っただぜ。」

確かに風邪を引いていたとは思えない顔色の良さだ。

「ゴメンね。この前知り合った社長さんがどうしても旅行行きたいって言うからさ。箱根で二泊もしてきちゃったよ。」

今度のは社長さんか。

「ちなみにその社長さんってというのは…」

「ん？女だけど。」

あー、やっぱり。

蓮はその美貌故によくモテるといふのは高校生としてまだ許容される範囲なのだが、わざとなのかそれとも本能なのかどうも年上と交際することが多い。特に三十路付近がストライクゾーンだ。と言っていたのを佑太は思い出す。

「それでさー社長がお礼につてこんなにくれたんだけど、今夜ぱーつと遊びに行かない？」

そう言つて財布の中身を覗かせる。なんと、諭吉さんが数十枚だと！？

「俺は部活の後で佑太ん家で数学のノート写すからパスする。」

「俺も立場上、さ。やっぱお前の出入りするような店には行けねーよ。」

蓮は一瞬残念がりながらも、すぐに満面の笑みを浮かべる。

「じゃあ、僕も佑太ん家行くよ。久しぶりに大家さんにも挨拶したいとね！」

まさか、俺の住むアパートの大家さん（37）までも手玉にとるつもりなのだろうか、こいつは。

そんな会話をしている内に最寄り駅に着く。

「じゃあ学校終わつたら各自佑太ん家に集合つてことで。」

「俺、新作のゲーム持つて行くぜ。」

「じゃあ、お菓子関連は僕に任せて。今だつたらコンビニですごい買い物できちゃいそうだしね。」

確かに。

「じゃあ俺は部屋提供するつてことで。」

駅を出て自転車置き場へと向かう。早朝のロータリーはまだ人もまばらで、ビルの隙間から朝日が顔を覗かせている。

見上げるとそこには澄んだ青い空が広がっていて、佑太は今日は何が良いことが起こる気がした。

時を同じくして、とある少女が自室でけたたましい音で目を覚ます。  
「なんだよ……って、もうこんな時間じゃん。ヤベっ、遅刻だー。」

そんなことなど、全く知らない佑太は学校へ向かう坂道を前に、  
1  
日の決意と共に自転車をごき出すのだった。  
「さあー！今日も頑張っていけますか。」



## 放課後の遭遇

午後4時15分 終業を告げるチャイムが鳴り響く。

今日は特に用事のない佑太は、剛史と蓮の来襲に備えて部屋の片づけに専念することにしていたので、彼らとの合流を待たずして自転車置き場へと向かう。

階段を降り始めたところで後ろから声をかけられる。

「よっ、会長っ！」

振り向くと隣のクラスの俊太が手を振りながら降りてくる。

「よお。どうでもいいんだが、どうしてひたいにそんな複雑な模様がはいってるんだ。」

俊太は自分の額を触って状況を把握し、苦笑いする。

「昼飯食ったあたりから記憶がなくてさ。てへっ。」

「気持ち悪い声出すなよ。っか、ちゃんと授業はうけるって言ってるだろ。」

相変わらず気楽な奴だ。この居眠り常習者の高橋俊太は高校で知り合った友達の一人で、部活にも所属していないことから、よく帰り道に一緒に帰る友人なのだ。

こんな関わってるとろくなことがなさそうな奴なのだが、これでも校内で徐々に勢力を広げつつあるオタクと呼ばれる一団の中ではマスターと呼ばれる存在らしく、会長選挙の折には蓮の獲得してくれた女子票に次ぐ票稼ぎをしてくれた、佑太にとっては大事な後援者の一人なのだ。

「この前からやってるギャルゲーの妹キャラがめっちゃかわいくてさ、昨日もずっと徹夜でフラグたて頑張ってたんだけど、今朝攻略wikiみたらその子のルートがないらしくてさ、もうやってらんないっての。佑太もそう思うだろ。」

一気にしゃべってからいきなり話を振られたので、戸惑ってしまう。というか、日本語のはずなのに理解できない単語が多すぎる。

「まあ、それは悲しいよな。」

現代文の能力を駆使しても理解できないと判断したので、差し障りのない返答でやり過ごす。

自転車置き場でオタク繋がりの方が俊太の元に集合したため、駅までの道中は賑やかなものだった。ただし、理解できたのは日常会話に比べると約八割と言ったところだろう。

特に、嫁の話というのは全く理解できなかった。彼らは、一夫多妻制のゲームをやっているのだろうか。何やらたくさん嫁がいるようで、彼らは自分の嫁について熱く語っているのだった。

「じゃあ今夜は205号室で。」

駅に着くとそれぞれの方面へと向かう彼らは口々に別れを告げて帰路につく。

「205号室って何だ。」

さっきの一人が口にした謎の暗号らしき言葉の真意を尋ねる。

「あーあれは、ネットゲームの待機室の部屋番号だよ。今夜は久しぶりにみんなでクエストやるんだよ。」

駅ホームへの階段を降りながら俊太が答える。

「200以上も部屋があるほどのゲームは流行ってるのか。」

「200じゃ足りないよ。確か1000まであったはずだよ。」

相変わらずネットとは広い世界だ。佑太の理解できる範囲はせいぜいケータイで友人のHPを閲覧するといったところまでだ。それ以上はついていけない自信がない。

考えるのも恐ろしくなり。おとなしく彼の嫁の話聞き流しながら、しばらくしてやってきた電車に二人で乗り込む。

車内はさほど混んではいなかったが、帰宅部の生徒が乗り込むのでドアが閉まってみれば結構な密度になっていた。

発車して間もなくの事だった。佑太が立つドアの前から斜め前の席では四人の女子高生が陣取り、お菓子を食べる姿が目立っていた。お婆さんが前にいるのにどういう神経してるんだか。

などと思っていると、その女子高生達の内の一人が、佑太とは逆のドアにもたれ掛かるホームレスの様な風貌をした男性に向かって、車内に響き渡る声で叫ぶ。

「おっさん汚ねー服で電車乗るんじゃねーよ。」

酷い言葉だった。その男性は言われ慣れているからなのか、黙ったままだったが、佑太にしてみれば、同じ高校の生徒が発した言葉とはとても思えなかった。

他の仲間もさすがにまずいと思ったのか止めに入るが、暴言を發したのがリーダー的な存在だったらしく、あまり強く止めるといいうようなことはしない。

隣の俊太の付けるイヤホンからは軽快なリズムが流れていた。

佑太は一つ腹を括り、自分なりの正義を通すために少女達のもとへと向かっていった。

## ふとみれば夜空

坂をだらだらと一台の自転車が登りながら佑太はやつとのことです帰宅する。

ドアの鍵を開け、窓を開け鞆を机に置いて一段落する。

なんだか、今日は一段と疲れた気がする。彼女達ははたして反省したのだろうか。いや、してないだろうな。

ほんの一時間前のことだとは思えなかった。

彼女達の暴言を咎めようと佑太は彼女達に歩み寄る。

「お前ら、ちよつと言い過ぎだろ。おじさんに謝れよ。」

突然目の前に現れた青年に茫然とし、彼女達は一瞬黙り込む。

「人に言っている事と悪い事ってのがあっていうことくらいわかるだろ。」

意外にもその一団は何も言い返してこない。ただただ暴言を吐いた彼女の事を見つめるだけである。これはきちんと話せば反省しそうな軽い不良気取りの連中だな。

そう確信しかかった時だった。

先程の暴言を吐いていた少女が立ち上がり、佑太に向かって毒づいた。

「何説教してんだよっ！！！！」

そう言っただけで彼女は軽く勢いをつける。

そして突然、立ちつくす佑太の頬にいきなり右ストレートをねじこむ。

「うおっ。」

油断していてストレートをモロにくらった佑太はそのまま倒れ込む。  
「なんだ、なんだ。」

イヤホンを外して俊太が駆け寄る。周りの乗客も異常に気付いたらしく、目を向けてくる。

「行こーぜ。」

殴った本人はまるで周りの目を気にしないで悠々と繁華街のある駅で仲間を引き連れ、降りて行った。

「…おい、…待て。」

いきなり殴られたせいか、追い掛けようにも上手く立ち上がることにできない。

「おい、大丈夫かよ。なんでまたあんな奴にちよっかい出しに行っただんだよ。」

俊太が心配そうに声をかけてくる。

「ちよっかいじゃねーよ。ってかお前、あいつの事知ってるのか。」

「藤堂美香だよ。お前知らないの。」

「知らないな。有名人なのか。」

聞いた事もない名前だった。

「普通科の奴なら誰だって知ってる不良だよ。この辺りじゃ敵なしらしいぜ。」

それはまた、とんでもない奴を説き伏せようとしたものだ。今更ながらに自分の正義感が恐ろしい相手に働いてしまったことに恐怖を覚えた。

そんな一件のすぐ後であつたので、勉強が手に付くはずもなく、片付けもやる気が怒らなかつた。テレビのコメンテーターが未成年の犯罪についての意見を述べているのが、なんだか軽快なリズムのようには聞こえてくる。

それではコマーシャルです。

女子アナの大人っぽい声を聞いたところで、佑太はそつと瞼を閉じた。

ふと目を覚ます。 気付けば11時前だった。 剛史達がくるまで時

間がない事に気付き、急いで片付けにとりかかる。

しかし、間に合うわけもなく、5分ほど経つと、インターホンが来客を告げるチャイムを鳴らす。

「開いてるよ。」

しばらくすると、エナメルバックに野球帽といった身なりの剛史と、両手にお菓子やらジュースを袋いっぱいを持った蓮が現れた。「相変わらず散らかってるね。おばさんが帰ってきたら怒られるよ。」

佑太の母は現在、父の赴任先である北海道で暮らしている。二年前までは、母と佑太の二人暮らしをしていたのだが、佑太の中学卒業を期に引越すことになっていた。しかし、佑太の強い思いと、剛史たちの願いから、佑太だけがこの町に残る事になり、以前に住んでいた家は売り払い現在は佑太一人でアパートに住んでいるのだ。

「まあ、正月までは大丈夫だろ。」

北海道はそんなに近い場所でもないので、母が帰ってくることはあまり無く、去年も正月に一度帰ってきただけだった。

「とりあえず、ノートはそこにあるから。」

「了解したぜ。」

よほど、期限が迫っているのかして、剛史はすぐにノートを写しにかかる。

「程よく間違えないと、写したってばれちゃうよ。剛史は馬鹿なんだからさ。」

蓮が暇をもてあまして、コーラをグラスに注ぎながら、剛史に華麗に鋭い言葉を浴びせる。

「お前も佑太から見りゃ変わらねーだろーが、馬鹿！」

「剛史、人に言っていい事と悪い事があるくらいわかるよね。この馬鹿野郎っ！」

「何だこの大馬鹿野郎」

そして、二人して小学生のように睨み合う。

こうなったらもう止められないのが彼らの喧嘩だ。

「ちゃっちゃと済ませて、宿題やらないとやばいんじゃないのか。」

一応、剛史には警告するのだが、

「いいか、佑太、男には引いちゃいけない時つてのがあるんだぜ。」  
いや、今は絶対にその引き時には当てはまらないと思うんだが…

「お前らもう知らないぞ。あとは勝手にやっててくれ。俺、コンビニ行つてくるから。」

そう言つて佑太はかばんから財布を持つて、家を後にする。

30分もすれば落ち着いてるだろうと考えながら、歩いて5分のところにあるコンビニに向かつて行く。

「さすがに深夜だと人通りも少ないな。」

なんとなく呟く。誰も聞いてはいないだろう。

歩いているとすぐにコンビニの看板は見えてきた。しかし、佑太はコンビニの駐車場の前でふと立ち止まる。

今、誰かの悲鳴が聞こえた気がしたのだ。

周りを見渡してみると、駐車場のすみに何やらにぎやかな一団が溜まっていた。

その中心で一人の男が、制服姿の女性の腕を強引に掴んで何か大きな声を出していた。

「おい……約束と違うだろ………にしるよな。」

腕を掴まれてる女の方も負けじと何かを叫んでいる。

これはまずいな…さすがに十人弱相手に太刀打ちできる訳がないことはいやでも理解できる。しかし、この状況は放つてはおけない。

さっきの剛史じゃないが、やはり引いてはいけない場面だと佑太は思った。

意を決して佑太はその一団に歩み寄る。

外側の取り巻きでタバコを吸っていた一人の男が佑太に気付く、

「なんだお前。」

その声で一団は一斉に佑太の方を見る。

「お前、何してんだよ。」

女の腕をつかんでいる男がいかつい形相で睨みつけてくる。

「男が群がつて女の子をいじめちゃまずいだろ。早く離してやれよ。」

「はあ！？悪いのはこっちだつーの。」

強情な奴だな。

「事情は知らねえけど、とにかく一人に何人もでいじめに掛かるってのはおかしいだろ。」

「お前が知らないだけで・・・」

男が佑太との会話に集中しかかって女の腕を放した時だった。

「走れ、佑太！！」

後方から剛史の声が聞こえた。

次の瞬間、蓮と剛史と思われる二人の人影が不良集団の中に飛び込んでいったのだ。

もちろんこうなったら佑太の仕事はひとつだ。

佑太は呆然と立ち尽くす女の子の手をとる。

「早くここから逃げよう。」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7450/>

---

雨上がりの街で

2010年10月13日04時33分発行